

《2023年5月 公開サロン（通算319回）報告》

＜ちちゃんと遊ぶための“サンマ”を考える②＞

敗者が言い訳の出来る運動場

－運動場屋さんから見たスポーツの空間－

石原俊秀（株パルカ）

【日時】2023年5月20日（土）17:00～19:00 ※終了後は懇親会（～22:00すぎ）

【会場】筑波大学附属高校体育教官室（対面）およびZoom（オンライン）

【テーマ】＜ちちゃんと遊ぶための“サンマ”を考える②＞

敗者が言い訳の出来る運動場－運動場屋さんから見たスポーツの空間

【演者】石原俊秀（株パルカ）

【参加者（サロンファミリー）6名】★はNPO会員

- ・対面参加 … ★石原俊秀（株パルカ）、★中塚義実（筑波大学附属高校）
- ・オンライン参加 … 磯和明、★嶋崎雅規（国際武道大学）、★茅野英一、★本郷由希

【参加者（サロンファミリー外）2名】

- ・対面参加 … 小針昇平（筑波大学附属中学）、卓小燕（人工芝メーカー）

【報告書作成】守屋俊秀

【目次】

はじめに－サロン通信 2023年5月号（2023.4.30.）

1. スポーツと運動場の歴史

2. 運動場の面白さ

・メジャーリーグ球場の面白さ

・距離の面白さ

・高さの面白さ

＜ディスカッション①＞

3. ハイブリッドターフについて

＜ディスカッション②＞

おわりに－2023.5.24.ML 投稿（中塚）

【キーワード】

遊び、サンマ、スポーツ空間、運動場、野球場、
スポーツ施設、グラウンド、アリーナ、人工芝、
ハイブリッドターフ、

はじめにーサロン通信 2023年5月号 (2023.4.30.)

【概要 (理事長より)】

「ちゃんと遊ぶための“サンマ”」シリーズ第2弾として、今回は「空間」(スポーツ施設)を取り上げます。(ちなみに第1弾は「行動規範」作成過程で取り上げた「仲間」です。あと一つは「時間」ですね)

演者の石原俊秀さんは、もとはといえば筑波大学附属高校のグラウンド改修でお世話になった業者さんです。「荒木田と石灰ダストの配合土」を入れていた本校グラウンドに、水はけのよい「グリーンダスト」を導入したのが20年ほど前でしょうか(筑波大学第一サッカー場も「グリーンダスト」でしたがいまは人工芝。今春張り替え工事が終わったところ)。株式会社パルカではグラウンドの土だけでなく、天然芝、人工芝、ハイブリッドターフ、あるいはコート面など多種多様なスポーツフィールドを手掛けておられます。

<http://paruka.jp/about.html>

サロンファミリー歴も長く、スポーツ施設についての話題提供をいつかはお願いしようと思ってきましたが、今般ようやくその機会が参りました。海外の事情も含め、スポーツ施設の在り方について幅広く情報提供していただき、みなさんとともに遊び「空間」のあり方について議論するのを楽しみにしています。

演者の石原さんからは、次のトピックが挙げられています。

- 1) スポーツ及び運動場の歴史
- 2) 日本におけるスポーツと運動場の歩み
- 3) 運動場の造り方
- 4) 運動場の管理運営
- 5) 運動場の多様化

ふるってご参加ください!

中塚: 定刻になりました。通算319回目の公開サロンを始めます。今日は対面とオンラインのハイブリッドです。筑波大学附属高校体育教官室には4名の方が集まっておられます。

本日のテーマは「運動場屋から見たスポーツの空間」、サブタイトルは「ちゃんと遊ぶためのサンマを考える②」としています。②ということは①があったわけですが、昨年12月に「ちゃんと遊ぶための仲間同士の心構え」を限定サロンで取り上げました。これが「サンマを考える」シリーズの第一弾で、年内に「ちゃんと遊ぶためのリスペクト宣言」を設けました。“仲間”のものを取り上げたものです。今回はその第二弾で、空間を取り上げます。ちなみに「サンマ」のうちのもう一つは「時間」ですね。

5月の土曜日ということで、ラグビーのリーグワンの決勝があったりJリーグがあったり、いろいろ重なっていますが、リアルとオンラインで何名か集まって下さいました。本題に入る前に簡単に自己紹介をし、そこから中身に入りたいと思います。

改めまして中塚です。筑波大学附属高校の保健体育の教員を36年も続け、今年で再雇用2年目です。今週から教育実習生が来ています。本当はこれが始まる前に月曜日の指導案が提出されるはずだったのですが、教生は来ません。どうなっているんでしょう。えらいことです。

小針：はじめまして。小針昇平と申します。所属は筑波大学附属中学校で、今年度より保健体育科教員としてお世話になっております。教育実習生は、中学の方は5人来ていますが、自分が6人目の教生になっていないか、少し心配なところです。どうぞよろしく願いいたします。

中塚：リアル参加されているのは、あとは石原さんとお一方なので、そちらを最後にして、オンライン組のほうお願いします。入って来られた順で、本郷さん、茅野さん、嶋崎さんの順でお願いします。本郷さんが声が出せないかもしれません。こちらから代わりにご紹介します。サロン2002理事の本郷さんです。都内在住ですが、もともと神戸のご出身です。

茅野：サロン2002の監事をさせていただいています。NPOかながわクラブの理事を25年ほど務めています。元は公務員でしたが、大学の教員をやっており、いまでも東海大学と神奈川大学でスポーツ関連の授業を持っております。どうぞよろしく願いいたします。

嶋崎：私は東京の帝京高校で30年ほど国語の教師をし、ラグビー部の指導をしていました。2015年からは国際武道大学、体育・スポーツ経営学を教えております。月例サロンは久々の参加となります。対面で申し込みましたが間に合わないので、急遽帰ってきてオンライン参加しています。

中塚：それでは本日の演者の石原さん、そして石原さんの教え子の女性が中国から来てくれていますので、お2人の紹介をさせていただいて石原さんの話に入ってもらいたいと思います。

石原：運動場屋の石原でございます。今日は着任36年の中塚先生の部屋に入れて光栄でございます。話題提供させていただきますが、よろしく願いいたします。

私の友人が中国の広州から先週来まして、お誘いしました。人工芝のメーカーに勤めていますタクさんです。

卓：初めまして、中国広州から来ましたタク・シュウエンと申します。初めて公開サロンに参加して勉強させていただきます。よろしく願いいたします。

1. スポーツと運動場の歴史

私、運動場を作って44年。その中で、野球場の研究をしていました私の恩師に沢柳政義という先生がいました。野球場を中心に色々と研究をしてまいりました。今日は少し野球に関する事が多くなるかもしれません。よろしく願いいたします。

今日の一番の最終的なテーマは、「敗者が言い訳のできる運動場」です。スポーツに関しては、勝者よりもはるかに敗者の方が多く、多数の敗者によって勝者が決まってきます。それを生み出している運動場を、私はたくさん、数えられないくらい作りました。途中で脱線してつまらない話になるかもしれませんが、そのへんはご了承ください。

まず、スポーツと運動場の歴史という話です。皆さんご存知のように、人類が生まれて、猿人、原人、新人…。日本人としては縄文人、その後大陸から来た弥生人がいます。縄文人と弥生人は我々の中に遺伝子として残っています。

運動やスポーツは、やはり人間が進化する中の遊びとか生活からでき上がっていると私は思っています。人類の遺伝子の本を読んだ時に面白いなと思うのは、アフリカから人間が出てきて、ヨーロッパ、北の寒いところから中国、東南アジアを経て、日本に来たと言われています。大きな文明の進化というか学びは、欧米の方から。スポーツ文化は黒船とともにやってきたと私は思っております。

運動というのは、生活経済、生きるためのものからくる運動がまずあります。原始的にやっていたものです。マンモスや象を、槍とか仕掛けをして食べていた。そこからはじまる運動があります。

もう一つは余暇の運動です。よく言われますが、ゴルフの例え話です。羊飼いが羊を飼いながら石ころを転がして穴に入れたことがゴルフの始まりという説と、オランダやフランスで発祥した説など、ゴルフにはいろんな通説があります。中には日本で発祥したと言い張っている人もいますが、それはそれでよろしいかなと思います。

サロン 2002 で皆さんが研究したり活躍する中のスポーツという文化は、余暇の側から発展した運動が主になってくるのではないかと思います。生活経済面から出てきたものはプロフェッショナルとしていまではやっています。やはり彼らは、体を自分の生活のために使っています。だからまあ共存していることもあるでしょう。

いろんな運動場があります。自然の中で楽しんだり活動するフィッシング、釣りですね。これも釣り競技があります。山登りも、一所懸命登って、寝転がったり、最終的にはマウントを取る。その快感は、登った人にしかわからないでしょう。そしてマラソン競技。子どものころにやった駅伝なども自然環境の中で行われます。道具を使うサイクリング。ツールドフランスのような自転車競技も自然の中で行われています。



中央下部の写真はセネガル相撲です。レスリングの発祥とか相撲に類似したものですが、このようにクッションのある砂場や海岸でやっています。モンゴル相撲や琉球相撲も、砂場を使ってやっています。川を使うカヌーなども、自然を使い、その中で楽しむレクリエーション、運動です。

管理地の中、例えば学校のグラウンドでも行われます。筑波大学附属中学高校は、長い歴史があると聞いています。学校のグラウンドは多目的が多いですね。

種目ごとに施設があります。テニスコート、野球場、フットボール場、サッカー、ラグビーからアメリカンフットボール、ラクロスなどもできます。



馬事競技は施設の中でやる場合と、野山に出て行く場合があります。高貴な方がやる馬術競技もあります。あとは室内競技のバスケットボール、卓球、バドミントン。昔はバレーボールは、バスケットボールもそうですけど、屋外でよく行われていました。徐々に屋内の体育館や競技施設ができ、室内競技のように思われている節があります。

日本古来からの相撲場、土俵も、室内の場合も屋外の場合もある。屋根をかけて土俵を作って。私が子どものころですと大相撲、我々は「東京相撲」って言っていましたが、いまの大相撲が巡業で地方に来ると、小学校や中学校の校庭に土俵を作るため、掘みたいに土を掘ってそれを盛り上げて中心

部に入れ、土俵を一段高くします。そうやって土俵を作っていたことを思い出しております。終わったら土を戻して平らな運動場に戻します。このようなものを作っておりました。

先ほど学校に来る時に、弓道部の男子が長い棒を持っていたので、「それは薙刀？」と聞いたら、「弓道の道具です」と言っておりました。いろんな施設で運動、余暇、スポーツを楽しみます。

2. 運動場の面白さ

◆メジャーリーグ球場の面白さ

先ほど言いましたが、私は野球場の研究をしており、野球的な面白さを感じています。一番思うのは、施設ごとに距離がまちまちということです。ダイヤモンドの中は27.44m。ピッチャーマウンドからは18.43mと決まっていますが、フィールドについては両翼が100mのところがあれば90mもあり、センターの長いところがあれば短いところもあります。皆さんご存知のように、メジャーリーグの球場はすごくいびつです。いびつな理由は歴史的なものがあります。街の中にできて、観客を収容するためにスタジアムができています。区画内で家がどかない、俺は立ち退きしたくないというのがあって、結構いびつになっている球場が多いですね。郊外に作っているパークなどは日本のように両翼が同じで、極端ないびつさはありません。

スライドに示したのはボストンレッドソックスのフェンウェイパークです。レフト側に壁があって、そこを超えないとホームランになります。壁に当たってもツーベースです。どうしてあの壁があるのかというと、その向こう側に道路があるんです。だから拡張できません。センターの方の奥には、ただ見ができるお客さんがいるビルディングがあります。これは狭い。両翼が極端に違います。

リグレーフィールドは、両翼がとても長いです。108mと107m。センターが121mです。途中は同じような距離ですが、途中にくぼみがあります。ユニークですね。

いま大谷選手が活躍しているエンゼルスタジアムは、両翼が100mと102mで、大谷選手はちょうど真ん中から左に打つ時が調子がいいようです。アップスイングで、ゴルフス

イングとも言いますが、あの長いところの130mまで飛ばしています。ベブルースが一番飛ばした時が163mだったと思います。そういう記録がありますが、計った人がいないのでわかりません。

東京ドームを作るにあたって、屋根の高さをどうしたらいいだろうという話が、私の恩師の沢柳にありました。それで打球の軌跡を追いました。私も行きましたが、神宮球場で3~4試合ゲームを見て、一球一球飛ぶ角度や落ちたところを記録して、自分たちでシュミレーションして、針金で軌跡を作ってやっていました。いまみたいにコンピューターはありません。肉眼で見た記録です。



学校の校庭を作る時に、近隣にボールが飛んだらどうだろうかとよく聞かれます。その時は、かつて恩師の先生と一緒にやった記録の取り方と、針金を用いてこうするんですよというような話をします。コンピューターで風速や初速を入力するのとほとんど変わらないですね。だから野球場のボールとか風は、面白いものだと私は楽しんでおります。

日本人ですから、野球は甲子園。阪神甲子園球場はよく聞かれますが、この高校生もまずは神宮を目指して次に甲子園へ行く。先ほどグラウンドで附属高校のピッチャーと話してきましたが、大会が始まるまでは、みんな甲子園で優勝すると思ってやっているんだよという話をして叱咤激励してきました。

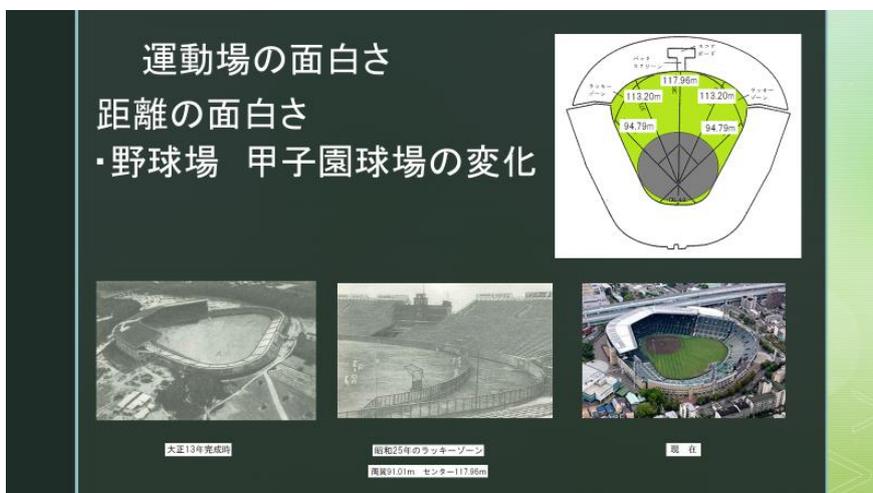
阪神甲子園は非常に面白い

球場です。はじめはメジャーリーグを見本にして球場ができています。ですから当初、フィールドはかなり大きかったです。スライドにあるように、両翼は約97mぐらい。センターは変わりません。ただ昭和25年に「ラッキーゾーン」という面白いものができました。観客を楽しませるためです。ホームランがたくさん出れば、一発逆転があって盛り上がるんじゃないかということでラッキーゾーンが設けられました。覚えている方もおられると思います。我々からすればつまらないゲームが多かったのですが…。

野球の本当のホームランは何だろうということをよく話します。いまのホームランは「エンタイトルホームラン」といいます。仮定のホームランです。ゴロゴロと行ったものは「ランニングホームラン」といいます。あれが本当のホームランです。例えば大谷選手が130m飛ばすとします。でもそこにウォールがなかったら、取ったらアウトですね。ボールが地面に着かなければ、それまでに取ってしまえばアウトです。するとゴロを打った方がいいわけです。ランニングホームランを出した選手はもっと称賛されるべきだと思います。ちょっと偏見かもしれませんが、私は遠くへ飛ばすことができて、足で稼いだ選手でしたので。

現在はスライドにあるように、両翼94.79mです。日本人はすごく数字にこだわります。実際にアメリカのルールと大リーグのルールが日本に来ていますので、ダイヤモンドの大きさは一緒です。センターフィールドの長さも公認としては一緒です。ただし先ほども言ったように、いびつな球場が多いです。

以前、広島のマツダスタジアムが新しくできた時に、あるところから要請を受けてプランニングに参加したことがあります。そこで広島カーブというものをいろいろ研究しました。皆さんよくご存知のように、機動力のある野球をしていましたが、もっと面白くするにはということで、ライトとレフトの長さを変える提案をしました。距離が長くなれば遠くに投げるわけですから時間がかかります。ライト側を2m長くして、レフト側は普通にとすると、2塁打、3塁打のスリリングなものが出るんじゃないかという提案です。また、海風の方向も考えました。近くを走る山陽線の電車や汽車が通ります。そちらから汽笛が鳴る方が良いのではと警笛を流しました。イチローがいた大リーグの球場のように、思い出ができるような球場にということです。さらに、観客が移動するにあたって新線を検討しました。広島駅からちょうど汽車で5分ぐらいです。そこに新駅を作って球場駅に行くようなプランです。しかし、我々の提案はすべて沈没しました。余談です…。



◆距離の面白さ

距離の面白さもあります。サッカーやラグビーなどの競技ではピッチの大きさがまちまちです。ルールにも、長い方で100mから110m。横幅が68mを基準として最大75m。そういう規定があります。私が調べたブラジルのマラカナン・スタジアムは、かつて110m×75mでした。いまの球技場は105m×68mです。ワールドカップ、オリンピックはそういうピッチを作ることとされています。距離によって戦術が変わってくると思います。距離が変わるといことは運動場の大きなポイントです。ただテニスやバスケットボールは距離が決まっています。距離が異なると、ボールが入ったり入らなかったりするるので困るでしょう。

会社で仕事していた時に面白い話がありました。山口県の軟式庭球大会でのことです。僕は現場にいなかったのだから聞いた話ですが、片方の選手が審判に「ちょっと距離が違うんじゃないか」と言ってきました。いつもしているのに入らないのでおかしいというのです。競技役員はそんなことない、お前が下手なんだと言って一蹴したのですが、あとで測ってみると1m違っていました。みんな総出でラインを打ち直したそうです。朝起きてその選手を連れて来て、競技役員が「ほら一緒だろ」と言っていたという話を聞きました。あり得ない話ですが、現実にはそんな事があります。施設のちょっとおかしいなと思ったら、自分で確認する方がいいですね。

もう一つ陸上競技場の話をしてします。かつて京都の西京極競技場で大会があって、ヨーロッパの選手がヨーロッパ記録を出したんです。するとヨーロッパの役員が「測らせて下さい」と。本当にちゃんと400mあるのかと言ったら、日本陸連の方々は「日本はちゃんと先に測っている」ということです。それでもまあ記録が出たので測らせてくれと言われ測ってみたところ「400m2cm」でした。そのぐらいの誤差、400mの1万分の1の中にあればいいので、「よくできていますね」と評価されました。世界的にも陸上競技場は、事前に測定しておくのが公認競技場として重要です。

駅伝やマラソンも一緒に、事前に距離を測っています。陸上競技場のトラックは、石の上で一周回って400mじゃないかと思われているかもしれませんが、石があってブロックがあって一段上がって、いまはレールみたいなものがありますが、そこから30cm外側を走った時にちょうど400mになるようにできています。プラス4cmまでという測定ですから、少しでも速く走りたい人は30cm以内で走れば少しだけ短くなるわけです。

ただ、私もずっと競技場を見てきましたが、走った後に傷が付いてきます。土の場合はそこが掘れていたり、いまみたいなウレタンやマットのスーパーエックスなどの場合は、同じところが傷つきます。どういう訳か、皆さん30cmのところを走ってます。ですから、ああよく考えてるなということなんです。白線だったらどうなのかというと20cmなんです。だから記録を伸ばそうと思ったら、そういう工夫もいいかもしれないですね。

先ほど言いましたFIFAワールドカップの場合、横浜国際総合競技場、日産スタジアムはFIFAの規定通り105m×68mでやっています。この数字はどこから来ているのかというと、陸上競技場のインフィールドだからです。フィールドに走り幅跳びなどの走路があります。その中に線を引くものですから68m。ちょっとワーニングゾーンを持っています。105mの方は円形の、赤くなったり、緑、青の部分があって、105mなら取れるというので105mにしています。ワールドカップやオリンピックなどではこのように定められています。

◆高さの面白さ

もう一つ、高さの面白さもあります。また野球場の話ですが、野球のピッチャーマウンド。よく解説者が言われるのは、いまと昔は高さが違うということです。また後樂園、東京ドームの高さと甲子園の高さが違うという方もいます。現在は規則化されています。スライドの左側に載せました。

プレートの高さについて、歴史的には初期のベースボールでは平でした。塁ベースと同じです。そうすると水が溜まるなど不都合が起きるということで、ヒル、丘を作ってマウンドとします。1904年、これは私の恩師が調べたのですが、塁ベースよりも15インチ、38.1cmの高さ以内で、高さは自由に変えてもいいという記録があります。ですから実際にいま皆さんが言うように、高いマウンドもあれば低いマウンドもあるのです。マウンドの形もさまざまでした。

私が運動場屋になった時は38.1cmという高さが決まっていました。形は自由でした。日本の場合はそうすると円形に作ったり円錐状にしたりピラミッド型に作ったりしていました。そういうことで、ルールの中でダイヤモンドを楽しんでいました。ボールが転がり出てファールになりやすいものを作ったり、ちょっと止まるなどというものを内野の中に作ったりしていました。亡くなられた常総高校の木内監督が土浦の川口運動場の野球場で練習や試合をする時に、最後にボールを転がすんです。これで外に出やすいとか、そういうことをみておられる。「で、先生、どうなんですか」って聞いたら、「いや、こうやっておけばね、相手チームの人が、あの先生はすごいと思うから、こんなやり方をするんだよ」と言っておられました。確かに事前に確認しているというのは、それだけ余裕があったのだと思った次第です。

1950年には塁ベースよりも15インチ、38.1cm高くを固定するという大リーグの規定ができました。日本も同じように、その年明けに決まりました。ただ先ほど言ったように、左側にあるようなマウンドの規則は一緒にはなりません。高さだけ決めたのです。1969年、私が13歳の頃にルールが変わりました。10インチ、25.4cm高くしなさい。形もこのようにしなさいというルールです。これは私の恩師、沢柳政義が野球のコミッショナーに、日本はいい加減なことをしてはいけない、これをコミッショナーとして発令してくださいと働きかけ、いまそのような形になっています。ですから高さは、ちゃんとした運動場屋さんが作るとみな同じになります。高く見えるというのは勾配の関係です。勾配を鋭角にすると高く見えます。ふっくらすると低く見えます。人間の目の錯覚です。解説者やプレイヤーが言っているのは間違いです。

<ディスカッション①>

中塚：ここで一旦切りましょうか。ここからまた違う話になりそうですから。

人類と運動の関係といった壮大なところから始まり、運動する場所がいろいろあり、スポーツがさまざまなかたちで行われるようになったこと、そして主に野球場を中心に、競技場の形や距離、高さの面白さを紹介していただきました。ここままで質問や気付いたこと、補足など、何でも構いません。いかがでしょうか。

年	高さ	特徴
初期	塁ベースと同じ	
1904年	塁ベースより最高15インチ(38.1cm)	高くその範囲内で高さは自由
1950年	塁ベースより15インチ(38.1cm)	高くを固定
1969年	塁ベースより10インチ(25.4cm)	高くを固定

嶋崎：貴重な話をありがとうございます。質問です。秩父宮ラグビー場でアシスタントレフェリーをしていると、反対側のタッチラインにいるアシスタントレフェリーの腰から下が見えないことがあります。真ん中が高くなっていると理解しましたが、グラウンドを作る時には水はけのことを考えて、中が高くて外が低くなるように作られるのでしょうか。

石原：おっしゃる通りです。運動、競技をする時に、水、雨というのは、一番厄介なものです。ですから早く水気が落ちる、下に流れるというのが望ましいですね。いまおっしゃられた秩父宮ラグビー場は、私が最初に見に行った時が40年ぐらい前でしょうか。おっしゃる通り、真ん中が50cmぐらい高かったです。ですから向こうが見えないんです。本当に腰ぐらいまで見えませんでした。秩父宮ラグビー場は特異なところで、たくさんの方の競技、試合をやりませう。ぐちゃぐちゃになるわけですね。特に黒土の上に芝を植えますが、使いすぎて芝生がなくなり、ただの水たまり。ぐちゃぐちゃになって、もう泥だらけの競技場でした。

それから徐々に芝生の管理の仕方がわかってきます。渡辺さんという方が一所懸命されていまして。いま管理されているのは齋藤さんという方です。勾配的には昔よりも半分ぐらいになっています。7%mmか1%mm。10mで1~2cmぐらいです。そのような緩やかな勾配になっています。

それでもやはり、サッカーと比べてラグビー場を作るときには勾配をきつくします。サッカーできつくすると大変なので、ラグビーに比べると緩やかですね。でも最近は兼用で使いますから、同じようになっています。

国立競技場の横幅は68mあります。真ん中からすると右と左になります。メイン側に三段跳があり、向こうのほうにもありました。すると距離が違ふんです。まずセンターは高いですね。右と左とすると勾配が変わりますよね。そうするとボールは勾配のきつい方に転がっていきますので、フォワードが走っている時は、必ずディフェンダーよりも先にボールに当たるようになるんです。斜めに走っていきますから。逃げて行くのと同じく向かってくるボールがありまして、それを戦略的に勉強している先生、監督さんもおられました。

余談かもしれませんが、Jリーグが始まったころの日本代表の国際大会の話です。渡辺さんに聞くと、日本側が「水を撒いてくれ」と言うんです。なんで水撒くのかというと、ボールが早く走った方が我々のチームにとって優位だからということでした。しかし向こうの方がもっとスピードがあつてどうにもならなかったという面白い話を聞きました。グラウンドを管理したり、グラウンドの特性を活かすということを研究して試合に臨むのも面白いんじゃないかなと思います。特に我々のような運動場屋は、特性をよく知ってますので。施設によって違います。違うようにわざと作ったりします。意地悪です。

嶋崎：ありがとうございました。

中塚：他の方はいかがですか。では私の方からも一つ。メジャーリーグの野球を見ていると、アメリカ人はこんな感覚でいいのかなっていつも思うことがあります。先ほども言われた競技場の形と広さの問題です。グリーンモンスタースタジアムでしたっけ。フェンウェイパークですね。片一方が狭くて、その代わり高い壁がある。これによってバランスをとっているのは理屈としてはわかるし、競技場ができた歴史的な背景も、考えてみればたぶんそうなんだろうなと思つていて、別にいいんですけど、なんか妙な気がするんですね。先ほどもあつた甲子園球場などと比べると、やはり日本人はきちんとしていて、左右対称なのが球場なのだという感覚を持っていると思うんです。アメリカ人の感覚と我々の感覚の違いはどこからくるのでしょうか。スポーツを遊びの中から作り上げてきた人たちと、外来文化

として受け入れた側の違いなのかもしれません。許容範囲の違いみたいなのが面白いところだなと思いました。茅野さんから手が上がっていますがこの関連でしょうか。

茅野：はい。先ほどもあった阪神のラッキーゾーンもそうなんです。子どもの頃から、なんでラッキーゾーンなんだと思っていました。ホームアンドアウェイで同じ数の試合をしているわけですが、そうするとホームチームの打者が有利になるに決まってるわけです。小学生のころから、両翼の長さが違っていたら右打ち左打ちで有利不利が違うじゃないか、これで公平な試合だとかホームラン王だとか、何で決められるんだってずっと思っていました。ホームランを誰が何本打ったという記録が出るたびに、これはいい加減なものじゃないかってずっと思っていました。皆さんどうですか？

石原：いい加減なもんです（笑）。プロ野球や大リーグは、一つのレクレーションなんです。ホームチームが勝った方が嬉しいですよ。ですからその選手の特徴によって球場を作る場合があります。先ほど私がマツダスタジアムの提案を出した時も同様です。そして試合はホームとアウェイをします。茅野さんが言うように、半分は自分のところでやるわけです。自分の有利な球場や施設を作った方が、ファンとしては勝った方が嬉しいですよ。そういうのが野球の歴史の中にあります。大谷君と比較されるベブルースは、ボストンレッドソックスから引き抜きみたいな形でヤンキースに行きます。その時にわざわざヤンキースタジアムを新しく作ったんです。右側と左側は、レフト側が長く、ライト側は92mぐらいだと思うんですけど、短くしています。だからホームランがいっぱい出ますよね。ホームラン王です。ただ、ギリギリで入るのは案外少なくて、明らかに飛んでいく。だから感激するんだと思います。観ている側としては、応援しているチームが勝った方がいいという理屈だと私は思います。サッカーも、やっちゃいけないかもしれないけど、ゴールを変えるとかね。

茅野：その通りですよ。サッカーでもホームスタジアムのゴールを黙って10cmぐらい大きくしたら（笑）

石原：ですから、案外みんな、日本人は信用するわけです。ゴールはみんな一緒と思っていますよね。バスケットのリングがちょっと違うと全部違うかもしれないですね。ゲームとしてやっても私は面白いのかなと思いますが、公平さの観点から、見る人にとっては納得できない施設かもしれません。最初に申し上げた本日のテーマは、「敗者が言い訳のできる運動場」です。野球場もそうかもしれませんね。

本郷：野球ほどではありませんが、サッカーも結構スタジアムによって違うなと思っています。僕は神戸出身なので神戸のチームを応援しています。いまは上手な選手が増えていますが、10年ほど前までは、技術的にそこまで上手ではない選手も多かったので、芝生を長く刈ってボールが転がりにくいようにしていました。技術的に上手な選手が多い強いチームは速いパスをつないでいくスタイルが多いですが、長い芝の影響でパススピードが遅くなるので足の遅い選手も頑張って走って追い付くようなことをして、ピッチの状況を使って戦力差を少しでも少なくするようなことをやっていました。最近はいニエスタ選手などの外国籍選手を含めて国内選手での技術的に上手な選手が増えてきたので、今度は芝を短くして、試合前に水をたくさん撒いて、パススピードが速くなるようなピッチにしています。野球と比較してサッカーは広さが統一されていますが、やっているサッカーによって、芝生の長さとか水の撒き具合とか、変えていくようなことが多いです。だから野球ほどではないかもしれませんが、意外と公平じゃないよなと思ったりしています。

それでも、こういうのも面白いなあと思っています。チームのやるサッカーに合わせてグラウンドの状況も変えていくというのは、あまり気付きにくいけれど、興味深いなと思っていたのをいま思い出しました。

石原：その通りなんです。だからブンデスリーガーでもスペインでも、サッカーのさかんな国はよくやりますね。

小針：興味深いお話ありがとうございました。球場の広さというところで、先ほど出たグリーンモンスター。あそこでボールが跳ね返ってイチローがランニングホームラン。それを見て、良くも悪くも面白いところがあるのかなと思いつつ、いや、競技として、選手からしたら悩まされる場所だなと思いつつ聞いていました。

質問です。日本の方がきっちりしているということで、左右対称であったり、そのあたりにうるさいといいますか、気配りしているところだと思いますが、日本は本当に最初から左右対称などを重視していたのでしょうか。歴史的なところとして昔からあったのかということ、わかる範囲で教えてください。

石原：国民性かもしれませんね。同じようなものを作っていますね。それと一番に僕が思うのは、野球場にしてもサッカー場にしてもバスケットコートにしても、公のところが施設を作ります。学校もそうですね。そうすると最良したらよくないと思うんじゃないですかね。メジャーリーグにしても、ブラジルやヨーロッパのサッカーにしても、クラブを優先します。先ほど言ったように、おらがチームが勝つほうが面白いわけですよ。そうすると、自分のチームに有利なように施設を作ったりします。それからボールが転がりやすい、転がりにくいなども含め、自分のひいきチームが勝てるようにする方がみていて面白いですよ。

今回の一番のテーマは、「敗者が言い訳が出来る運動場」です。面白くないですか。だってせっかく一緒懸命頑張っているけど負ける人の方が多いんですよ。自分に力がないと言うより、秩父宮ラグビー場は「ここが盛り上がったから俺は走るのが大変だった」とか、両翼の長さが違うから「本当はホームランだったのに取られたんだ」とかね。言い訳の出来る運動場を、私は作りたいですね。ですから、私が依頼されると、ホームチームの特性、戦略的なものを考えて施設を造ることを提唱しています。ただ、やはり公の場合は、右左じゃないですけど、同じようにしないと、選挙にも通らないですからね。そういうのもあると思いますけど、どうでしょう。

小針：そうですね。グラウンドを口実に「負けても…」というところが着眼点として面白いなと思います。ありがとうございます。

石原：日本人的には、僕の話は「ちょっとおかしいんじゃない」とよく言われるんです。公平にやろうじゃないかということです。ただ、風も吹くし、状況によってはコンディションも変わってくるわけですよ。まるっきり同じ条件でするんだったら、運動はしないで、体力とこれまでの実績でポンと押したらどちらが勝つよなというようなことでいいのかもしれない。けどそれだと楽しみが減るんじゃないかという気がしています。いまコンピューターでするEスポーツ。指が上手な人、頭で訓練するだけのようものが出来ているのではと思います。

中塚：すごく面白い話になっていますが、このままこの議論だけで終わっちゃいそうな勢いもあるので、次へ進んでもらいたいです。お願いします。

3. ハイブリッドターフについて

皆さんにご紹介したいのがハイブリッドターフについてです。ワールドカップ以前から耳にされていると思いますが、これまで思っていたものと印象が異なるかもかもしれません。

ハイブリッドピッチというものが、いまから36年前にオランダで開発されました。オランダは日本と同じように面積が狭いので、芝生も傷みやすいということで、国とオリンピック協会ではいろんな会社に提案してもらいました。その中で出てきたのが、絨毯屋さんのデッソという会社が提案した、地面の中に人工繊維を打ち込むという「グラスマスター」という技術です。それがずっと続いており、今回のワールドカップやオリンピック会場、イギリス、ドイツ、フランス、スペイン、アメリカ、ブラジルなど、いろんなところで標準化されています。どういうものかをご紹介します。

ハイブリッドターフには、大きく分けて2種類あります。先ほど言いました繊維を打ち込んで補強するタイプ。垣根の木が倒れないように、芝生の草が取れないようにする方法。もう一つは、粗い人工芝を置いて、畑で一回作る方法で、グラウンドで作る方法もあります。それを持ってきて置いていく絨毯タイプという、大きく二つあります。本来のハイブリッドターフは絨毯式のものだと思います。30数年続いている、プレミアリーグやバルセロナ、レアルなどがスタジアムで使っているのは補強タイプです。今日は二つを紹介します。

ハイブリッドの補強をしているスタジアムの例が神戸ですね。三木谷さんがいろいろといちゃもんをつけて神戸市にやってもらいました。シートタイプは横浜です。横浜国際は失敗してなくなっています。取り換えました。大分はまだ残っています。一長一短はあると思います。

<ここから動画の予定が不調。パルカのHP <http://paruka.jp/about.html> をご参照されたい>

先ほど言いましたように、「敗者が言い訳出来る運動場」が、私にとっては誇りです。完璧な、というか、皆に公平なグラウンドとか施設だったら可哀そうです。言い訳が自由にできる。それが理想です。雨が降って1コースで走ったらダメだった。だから陸上競技場は、以前は8コースでしたがいまは国際試合などの大会をするときは9コースにしています。1コースで走らせないためです。走っているところは窪みができたりしますので、そうすると言い訳が出来なくなっちゃうんです。公平公正さは必要かもしれませんが、負けちゃった、でもどうしてかって時に、鉄砲がうるさかったとか水たまりがあったとか転んじゃったとか、そういう競技場がいいと思います。

先日も愛工大明電の倉野監督と話しました。最近どうですかって言ったら、「練習試合で負けると勉強になるよね。生徒も成長する。勝つよりいいよね」って言うておられました。良い選手がいますので、負けて勉強して甲子園を目指し、夏の大会を目指し、出るだけでいい。去年は一回勝った。なかなか勝てなかったけど、勝ったらうれしかった。でもそれでも負けています。

でもそういう、負けた人が理由を受け入れられるグラウンドとか施設を、私は作りたいです。

今日はこのような機会を作ってください、ありがとうございました。

<ディスカッション②>

中塚：どうもありがとうございました。途中動画が動かないトラブルが発生しましたが、パルカのホームページにいくつか載っています。続きはぜひHPを見ていただければと思います。

残り15~20分くらいですが、石原さんが問題提起して下さった「敗者が言い訳の出来る運動場」について意見交換したいですね。運動場のあり方みたいなどころでしょうか。トップレベルから草の根

レベルまでいろいろあると思います。言いつばなしで構わないのでおしゃべりをして、この場を締めたいと思います。いかがでしょう。

ではまず私から。筑波大学附属高校のグラウンドを、ずいぶん前から石原さんにみていただいています。うちのグラウンドは山手線内にしては珍しく、ほぼ正規のサッカー場をとることができます。

105m×68mは無理ですが、100m×66mでピッチをとっています。だから中体連、高体連はもちろん、私が東京教員で現役選手をしていたころは、関東社会人リーグ1部の試合もここでやっていました。

ただ、学校のグラウンドなので野球部ももちろん使います。すると皆さんおわかりだろうと思うけど、マウンドがあるんです、あったんです。ちょうど右サイドから切り込んで行った時の右45度ぐらいにマウンドがあり、そこでこけるアタッカーや、バックステップしながらすつ転ぶディフェンダーがいつばいい、「言い訳」になっていたんじゃないかと思います。

しかしもう一方で、体育の授業でもそこを使うので、部活でも同じですが、こけ方がまずいと手首の骨を折るんです。実際そういうことが何度かあって、野球部には悪いけれど、マウンドをちょっとずつ削っていました(笑)。最終的には、これまた石原さんに相談して、移動式マウンドを、100万円ぐらいしたんですね、たしか。そのお金をいろんなところで工面して、野球部のOB会がだいぶ出してくれたんですけれど、お金をかき集めて購入しました。野球をちゃんとやる時は移動式マウンドを置き、普段の体育で使う時には平らのグラウンドでやらせてよ、ということにしています。言い訳の面ではどうかかわからないけれど、安全性は高まったと思います。

こんなエピソードも含め、議論がかみ合わなくて言いつばなしで構わないので、思うところを言ってもらえるといいかなと思います。では嶋崎さん。

嶋崎：私はずっとラグビーのレフェリーをやっていたのですが、ラグビーのピッチは結構いい加減で、特に長さはいい加減です。レフェリーに行くと最初にすることは、グラウンドを一周しての歩測です。幅が何mあるか、縦が何mか。ラグビーの場合、ゴールラインからの22mラインとハーフウェーラインからの10mラインはちゃんと測っているんです。その間が詰まっているグラウンドが結構あります。縦が100mないグラウンドはよくあって、必ず歩測をしていました。

逆に言うと、10mラインが10mなかったら直してもらおうように、会場の責任者に言っていました。中間のところ長い、短いほうはもうほっといてゲームをやります。

左右が非対称のグラウンドもあります。でもこれは前半と後半で入れ替わるのだから公平だと。もラグビーの人たちはみんなそう言って、あまり気にせず、左右非対称でもやっていました。ラグビーはその辺には結構いい加減です。それが大学リーグとかのリーグ戦なんかでやるようなグラウンド、高校の大会の一回戦、二回戦とかいうレベルではなくて、関東大学リーグぐらいのところでも、そんなグラウンドを使ったりすることもあるって、結構アバウトにやってきました。

言い訳できるんじゃないかと十分思います。

中塚：ありがとうございます。ラグビーもサッカーも同じような思想を持っていますよね。サッカーの国際試合は105m×68mが推奨されているけど、ピッチサイズには幅があります。だからそれぞれのスタジアムというか、プレイグラウンドのある地域の事情によって、大きさは緩やかに調整できます。それに、嶋崎さんも言われたけど、前半と後半で入れ替わるのだから別にえーやんという感覚があります。そういうスポーツですよ。

ちなみに、105m×68mというピッチサイズは、昔はあまり言われていなかったと思います。最近すごく気になっているのは、高校の指導者が「105m×68mない会場は公式戦にはふさわしくない」と言っていることです。これは非常に悲しいですね。狭ければ狭いなりにプレーの仕方を変えればいいだけの

話です。大人がルールやマニュアルに縛られ、遊び心を失っているのと繋がっているような気がしています。

石原：いまの中塚先生の話に準ずるんですけど、我々運動場屋としても同じなんです。例えばグラウンドの敷地が決まっています。その時にどうするかというと、やはり遊ばないと面白くない。言われたように、狭いところは狭いところのプレーが出来る。極端に言ったら、選手によって、長く走るのはまずいけど短い所でちょこちょこやって出来るとか。かといって今度大きくすると、大きなチーム、それを得意とするところも出てくると思います。

さっき話があった、どんくさいチームは芝生を長くして、走って追いつくじゃないとか、持久力があるとか、そういうのもいいですね。だから施設について、なぜ我々がスポーツ、運動を楽しむかということ、体力の違いがそれによって補えるところにもある。小さい路地でも遊ぶ。ボールでの遊び方も変わるし、いろんなものが経験できるから、楽しめる。そういう楽しめるサンマのような話をして下さい。お願いします。

本郷：感想になりますが、僕は今日の話聞くまでは、出来ればマウンドもなくて、あまり狭すぎないピッチでサッカーをしたいと常々思っていました。今日のお話を聞いて色々思い出してきたことがあります。初めて対戦する相手チームと、その対戦相手がよく利用しているグラウンドで試合をしたときの事です。横幅がとても狭いグラウンドで、なんかいつもより狭いなあと思いながら試合をしていて、ずっと0対0で試合終盤までできていたのですが、狭いから普通のスローインでもロングスローみたいになるんです。それを最後に決められて負けました。公式戦でもなくて、おじさんの練習試合だから別にいいんですけど、この人たちはこの狭さに順応してそういうことをいつもしているんだろうなと思いました。その時はあまりいい気分ではなかったですが、今日のお話を聞いて、それも楽しむのが本来なのかなという気になって、僕の考え方の幅が広がりました。マウンドはやっぱり嫌だなとまだ思いますけど。

中塚：マウンドはね、ちょっとずつ削るなど…（笑）

本郷：どこでも同じことをしていますね（笑）。でも逆の立場で、野球部の人嫌だろうなと思って自重しています（笑）

石原：野球少年の話を聞きました。中塚先生にマウンドを取られてしまったと、野球部員は言っていました。

中塚：さっきも言ったけど、100万円ぐらいの移動式マウンドを、グラウンドの脇の人工芝になっているところに置いているんです。けど、はっきり言って重いんです。だから野球部の子たちは練習の時にいちいち持って行かないんですね。面倒くさくなってしまう。そのうちなぜか知らないけど、移動式マウンドの上の面がはがれ出して。この間もその改修をされていましたよね。それでまた20万円かかって。もうちょっと軽いのがないのかなと思いますね。

別に野球少年をいじめているわけじゃないんですよ。使わせてあげたいんですけど、なんか使い勝手が悪いなあというのは、移動式マウンドを導入して思いましたね。

石原：どうしても日本の場合が多目的となりますね。施設が少ないものですから。相容れないもの、例えばラグビーとサッカーは、高校の時によく言われたんですけど、ラグビー部はドロドロになって

もいいんです。ボールがどっちにこぼれるかわからないから。だから半分ずつ使うと、片方は整備してきれいだけど、ラグビーが使う方はぐじゃぐじゃ。それを直すのがサッカー部というような、施設、校庭の使いかたでした。

小針：自分も感想になってしまいますが、私は専門がバスケットボールで、中高大と続けてきました。出身校にはちゃんとしたコートがあり、28mと15mです。ただ、練習試合に行くと、体育館に全面が張れない学校がありました。懐かしく思ったのが、「ここ正規じゃないから今日は楽な試合かもな」って友だちとベンチで話したことです。たかが1mか2mの話だと思えますけど、コートが小さくて、気持ち歓喜というか。自分たちのチームはひたすら走るチームで、監督さんも檄を飛ばすような方なので、1m、2m狭いだけでもちょっとウキウキしたことを思い出しました。コート、グラウンド、感慨深いものがあるなど、お話を聞いて思いました。

中塚：ありがとうございます。ということで、サンマのうちの「空間」をめぐる話でした。どちらかというと野球場の話からサッカーあんの外種目、フィールドの話が中心だったかもしれませんが、いま小針さんが言われたアリーナの中の話もありますよね。例えば体育館でもいろんな種目が併用するので、いろんな色のラインが書かれています。この話も改めて取り上げたいなと感じました。また機会を見つけて続編をしたいと思います。

最後に石原さん、全体として締めコメントをお願いします。

石原：今日はありがとうございました。運動場屋の話でございました。

いま中塚さんが言われたように、ラインが体育館の中にいっぱいある。まあ自分のゲームだったら見えるかもしれませんが、いろんな工夫、例えばブラックライトでその線が浮き上がってくるようなことが出来るというようなことをしていけばまた楽しい、言い訳の出来ないコートができるかもしれません。そのようなアイデアをお持ちの方がおられましたら、お酒の席で言ってください。どうもありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。では一応中締めとしたいと思います。

おわりにー2023.5.24.ML 投稿（中塚）

サロン 2002 ファミリー（含 NPO 会員）各位

教育実習真っ只中。今年も振り回されています（笑）。実習1週目の土曜日に開かれた公開サロンは、対面とオンラインの併用型でした。対面参加者が少なかったのが4月同様、筑波大学附属高校体育教官室（相変わらず散らかっている！）から配信しました。

メチャクチャおもしろかったですね。議論も尽きません。参加者が少なかったのがもったいない…。続編をやりたいと考えています。話題提供して下さった石原さん、中国・広州から出張で来られた卓さんはじめ、ご参加くださった皆さん、ありがとうございました。

終了後はものすご〜く久しぶりに、カリンカ→ルンの流れを汲む、護国寺駅近くの中華屋へ出かけました。コロナ前と変わらぬ「品菜軒」です。コロナ中もたびたび昼食で訪れていました（5/20の昼食も）が、夜の飲み会で行くのは3年ぶり。また利用したいですね。

参加者名のみ報告します。報告書作成は守屋俊秀さんです。守屋さんは他の予定と重なり参加できませんでしたが、テーマに興味を持ち、文字起こしに立候補してくれました。このようなお申し出は大歓迎です！

次回は6月17日(土)、NPOサロン2002総会後の意見交換会＝限定サロンです。16:30～18:00の予定です。

月例サロンは原則として、サロンファミリー相互の話題提供・情報交換の場として展開しています。7月以降の演者・テーマを募集しています。理事長までお申し出ください(いくつか候補があるので調整します)。

以上